



100回を迎える夏の甲子園

～高校野球は私にとっての心のふるさと～

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

私は高校入学と同時に、何のためらいもなく野球部に入部した。「甲子園」への憧れもなかったわけではないが、そのことよりも、当時、県内で高校野球の指導者として高い評価を得ていた山谷喜志夫監督のもとで、大切な高校生活を送ってみたいという気持ちの方が強かった。将来の進路のことを深く考えず、「高校野球」最優先の発想は、入学当初の高校生としては、いささか軽率の誇りを免れないが、今にして思えば、小学生時代、父の「スポーツが人を成長させる」という考え方、教えが影響していたように思う。

小学生時代は三角ベースで野球に興じ、中学・高校・大学では野球部に所属し、野球に熱中した。東京での遊学後は、地元に戻り歯科診療の傍ら40年間小学生の野球と関わった。これまでの私の野球中心の生活が、私の人生観、社会観だけではなく、ものの見方まで大きく変化させたように思える。とりわけ、山谷監督のもとで過した「高校野球」がその後の人生に大きな影響を受けていることに気づき、今更ながら驚いている。

今から60年も前の高校野球体験なので、現在とは社会的背景も、高校野球を取り巻く環境にも大きな違いがあることから、単純には比較出来ない点も多いが、「野球」というより「戦場」

という印象の方が強かった。夏の大会に備えての強化合宿でも「生たまご、豚汁、冷やっこ、大盛のごはん」が定番。後援会の方からのカレーの差し入れが唯一のご馳走だった。練習中は水も飲まず、連日の炎天下での練習によくも耐えられたものだと思う。非科学的で、理屈に合わない練習も少なくなかったが、その先には「きっと人としての成長があるはずだ」という山谷監督への信頼と期待と、私自身の高校野球への強い思い入れがあったので、簡単には高校野球から離れることが出来なかった。

山谷さんは、高校時代鬼監督の印象が強かったが、卒業後、社会人となってお会いしたときには、いつも温かく迎え入れ、接して頂いた。晩年、体調を崩され、入院されたときには、球友仲間と病院生活のお手伝いをしながら、ご恩返しの真似ごとをさせて頂いたが、そのなかで改めて、山谷さんの優しい心音に直接触れ、高校時代には理解できなかった監督の言動や考え方もすべて納得でき、さらに当時の怖い印象も完全に払拭された。山谷さんは厳しさと優しさと温和さが同居するような懐の広い「師匠」であり、「おやじ」でもあった。山谷さんは、最期まで監督と部員との立場をきちんと貫き通し、74歳で部員たちに見守られ、この世を去った。後に奥様とお会いし「あなたたちには何も言わ

なかったけれども、入院中お父さんはいつもみんなに感謝していたのよ…」と告げられ、思わず涙が溢れた。山谷さんの許で過した「高校野球」は私の心のなかで、いつまでも脈々と息づいている。高校野球は自分の根幹を築き、成長させてくれた。山谷さんの部員一人ひとりに向けた情熱と愛は忘れられない。当時の苦しい場面や厳しい監督の顔をふと思い出し、目頭が熱くなることもある。

私は高校時代、甲子園出場の間もなく、誇れる活躍も何一つないが、高校野球なしではとても人生を語る事が出来ない。今、改めて思い起こし、振り返ると、高校野球には栄光や実績づくりだけが目的ではなく、他にも多面的な価値があったように思える。例えば、好きな野球を仲間と共に挑戦し続ける価値、野球を通して人として成長する価値、監督と部員との信頼関係を醸成させ、充実した学校生活を送る価値、高校野球を愛し、我が子同様、グラウンド脇の土手から熱い声援を送り支えてくれた人たちへの感謝、鬼監督のもとで、先輩・後輩と共に励まし合い、辛苦を共にしたことなどなどが思い出される。他人から見れば、ささいなことでも、高校球児にとっては、すごく大切な瞬間瞬間があるものだ。高校野球は私にとって心のふるさとである。

100年を迎える夏の甲子園大会は国民の大きな支持を受け、今や、国民的行事になったが、でもその一方で「高校野球＝甲子園」となり、「勝たねばならない」の価値観が高校野球全体を支配しているのも現状である。高校野球は純粋で、夢の多い高校球児にとっては将来の生き方、進路にも深く関わりを持つので、周囲の大人たちのより慎重な対応が求められる。

近年、甲子園大会での私立高校の台頭が目につ

く。全国的に私学の強豪校では有望な選手たちの越境入学が当たり前になっている。有望選手を集めるため、グラウンドはもとより、プロ球団並みの室内練習場や、寮の設備も整えられている。それに比べ、公立高校の多くは狭いグラウンドを他の部活動と共用し、用具を買うのもままならぬ学校も少なくない。このように高校野球を取り巻く環境は一様ではないし、学校の実情によって、高校野球への対応や、考え方にも強弱があるのも当然と言える。だから、その格差を嘆くよりも、その差をどう埋めるかのほうがより大切だと思う。公立高校主体の本県の現状を考えると、私学の強豪校と四つに渡り合い、覇を競い合うことは決して簡単なことではない。しかし、それでも臆することなく、そこに挑戦することこそ高校野球の本道であろう。選手を集めて勝つことに比べれば、当然、苦勞も多いが、だから挑戦する意味がある。

平成19年、夏の甲子園大会では、地元の中学校の軟式野球出身の選手ばかりの佐賀県立佐賀北高校が初優勝した。学校からの部費は60万円程度。バットやボールを買うと部費は全部使い切ってしまうという。そんな普通高校の快進撃だった。佐賀北高校の優勝は選手を「集める」のではなく、選手を「育てる」ことの大切さと共に、公立高校でも全国制覇出来ることを実証した。

本来、高校野球は「人間形成・教育の一環」を心のよりどころとして発展し、100年を迎える。夏の甲子園大会100年を機に、高校野球の過去を検証し、現状を見つめ直し、継承すべきことと変えるべきことを明確にすることが、今求められている。日本高野連はアマチュアリズムの牙城を守り、教育の原点を貫いてほしい。それが元高校球児からの切なる願いである。